

発表用スクリプト

PP1

2025年聖典に親しむ会5月25日午後枠後半発表の 眞下ひづる です。

発表のタイトルは

曇鸞大師は何故そこで南無阿弥陀仏を出されなかったのか
一八案問答の下下品の経文の加減に曇鸞大師の念仏を尋ねる一
です。

I。本論に入ります。まずなぜこのようなタイトルになったかを説明します。

八番問答は天親菩薩が「無量寿修多羅章句 われ偈誦をもって総説し竟んぬ」と置かれた後に曇鸞大師が置かれた八つの問答です。第十八願文の最後に付加された、救いから除外される五逆と誹謗正法とは何者のことか、救いとはどういうことかという問答が重ねられるにしたいが、五逆誹謗は私のことであることが知らされ、私が十念念仏に救われるとはどういうことであるかと私自身への問いとして深められていった。自分の問題となさしめられたところに八番問答をおかれた曇鸞大師のおこころを感じました。

一方で、私は言葉にとらわれて、語句の使われ方が気にかかります。

曇鸞大師に質問したいことがあります。

PP2

「何故、第一問答に引用されている『観経』の「下下品」の「南無阿弥陀仏」という言葉を「南無無量寿仏」にかえられたのですか？」

PP3

資料1は論註第一問答と観経の下下品の対比です。

資料1をご参照ください。

PP4

引文と経文の間には6か所の語句の違いが見られます。

今、問題にしているのは、④の『観経』（大正新脩大藏経）の「阿弥陀仏」を『論註』では「無量寿仏」に敢えて変更しておられる箇所です。

（経）④具足十念稱南無**阿彌陀佛**⇒（論註）④具足十念稱南無**無量壽佛**

PP5

さらに曇鸞大師は第六問答の問いに、観経の下下品に先の引用文とは異なる加減を施しておられます。

「資料2 論註の第六問答と観経の下下品の対比」をご参照ください

PP6

『論註』の第六問答と『観経』の下下品を比較すると、6か所注意を惹く点がありました。

- ① 「如観無量壽經言」と出される中で、『観経』を加減して、『大経』の課題と『大経』で使われる用語を入れておられる。『観経』と『大経』のつながりが以下の文中で明示される。
- ② 『論註』では愚人という主語がない。
- ③ 善知識が教えてから愚人が念仏するまでの経過が省略されている。
- ④ 具足十念の後に何も行為が記されていない。
- ⑤ 具足十念の後に『願生偈』の「便得往生安樂世界」と『大経』の課題である「即入大乘正定之聚畢竟不退」がはたらきとしてあげられる。『観経』の経文でははたらきは「除八十億劫生死之罪」である。
- ⑥ 第一問答の引文の中で隠された「阿弥陀仏」がここで「十念念阿弥陀仏」としてだされている。（具足がつけられていない。称でなく念である。）

繫業之義の「以十念念阿彌陀佛便出三界」に対応の経文は、敢えてあてるなら「念々中除八十億劫生死之罪」であろうか。

このことは何を意味するのでしょうか。

PP7

この二つの引文のされ方より推測できることが三つありました。

* 1 第一問答の引文部分より。「南無無量寿仏」と称すると「八十億の生死の罪が除かれる」とは無量寿仏のはたらきを受けて罪業があきらかになり受けとらせていただいた状態をあらわす。

* 2 第六問答の引文部分より「十念具足の十念は十八願文の乃至十念が至心回向された十念。愚人は自分の行としての称名は必要がない」と考えられたのではないか。だからここでは十念具足の後に「称南無阿弥陀仏」も「南無無量寿仏」もおかれなかったのではないか。

* 3 「十念念阿弥陀仏 出三界」は 観経の念念に対応している。これは相続の十念をあらわす。念阿弥陀仏は本願成就の乃至一念。阿弥陀仏を念じるその瞬間が三界を出るとき。それが念念に相続される。

このように曇鸞大師が念仏を受け止めておられたことが引文の加減にあらわれているように思われました。

要検討 この推論が妥当なものであるか皆様の御意見をおうかがいしたいです。

PP8

次に付録ではありますが、

南無阿弥陀仏の経典への出現

「阿弥陀仏」と「無量寿仏」という用語は三部経・龍樹菩薩・天親菩薩の著作の中でどのようにあらわれているのだろうか。

ということ調べてみました。

PP9

まず『観無量寿経』に混在する「阿弥陀仏」と「無量寿仏」の出現箇所を確認しました。

資料3『観無量寿経』の「無量寿仏」と「阿弥陀仏」をご参照ください。

PP 1 0

「無量寿仏」と「阿弥陀仏」の出現箇所に焦点を当てて物語の流れをまとめると、次のようになります。

1. 観無量寿経の題が示すように、無量寿仏と土の観察方法が説かれている
2. 最初に阿弥陀仏が出るのは韋提別撰で、韋提希が極楽世界の**阿弥陀仏**のもとに生まれたいと楽う
3. 韋提希が仏滅後衆生はどうすれば極楽世界の**阿弥陀仏**に見えるかを問う。釈尊は国土の観法を説かれる。
4. 国土の総観想（第六観：成就是除無量億劫極重悪業 命終之後必生彼国）が終わったあとで阿難と韋提希に除苦悩法を説くと宣言される。その時空中に**無量寿仏**が二菩薩と住立する。
5. 韋提希は未来の衆生がどうすれば**無量寿仏**にまみえることができるか方法をたずねる。釈尊は**無量寿仏**を観ずる法を説かれる
6. 雑想観（第十三観）（仏土仏身の観察の最後の観）で「**無量壽佛** 身量無邊、非是凡夫心力所及。然彼如來 宿願力故、有憶想者、必得成就。但想佛像、得無量福。何況觀佛 具足身相。**阿弥陀仏**、神通如意 於十方国 變現自在」**無量寿仏から阿弥陀仏に主格が変わる。**
7. この後九品往生に入る。往生極楽国を願う行者に**阿弥陀如来**が至る
8. 流通分では「此経名観極楽国土 **無量寿仏** 觀世音菩薩 大勢至菩薩。亦名淨除業障生諸仏前。」持**無量寿仏**名 經の名の無量寿仏でおわる。

PP11

これからわかったことは

阿弥陀仏と無量寿仏の登場する箇所が分かれているということでした。

「無量寿仏」は無佛の時の衆生が極楽世界の阿弥陀仏にまみえることができる観法の中の主格です。観が成就すれば、「苦悩罪業が除かれ命終之後彼の国に生まれる」、「念仏三昧

を得る」、光明に攝取される等の利益が記されている。観経の中に華座が「本法蔵菩薩の願力の所成」であることを明示されています。ここで大経と交流しあう經典であることが示されます。

「阿弥陀仏」は仏国仏身の観法が終わり、衆生の救いに焦点があてられる九品が阿弥陀仏が主格の舞台になる箇所から主格として登場する。衆生は極楽世界に生まれることをあるいは願求し、あるいは念仏する。それに応じて「阿弥陀仏」はその人のもとに至る。

又余談になりますが

「阿弥陀仏」は『阿弥陀経』の主格です。『阿弥陀経』を曇鸞大師は『論註』で「舎衛国所説の無量寿経」とよばれている。そして「無量寿仏」は安楽浄土の如来の別号であるといわれている。「阿弥陀経」と「観経」と「大経」をあわせて『無量寿経』とされていることが「王舎城及び舎衛國に在して」説かれた経であるといわれていることから明らかである。

以上より

三経の主格が『観経』で混在するのは、衆生救済の道理を明らかにするためであろうと思われました。

要検討 諸先生方は観経の中で阿弥陀仏と無量寿仏が出されることについてどのようにお考えであるのか。お教え願いたい。

付録（スピンオフの話題）

PP12

そしてそこには翻訳者の意図も大きく影響していたとおもわれます。

PP13

翻訳の歴史上、翻訳者の思想が翻訳されたものに反映された影響は大きいと思われます。浄土教經典の中に出てくる「無量寿仏」「阿弥陀仏」「安楽国」「極楽国」の用語の訳出されている箇所は資料4 浄土教經典の中の仏土名仏名に簡単に例示しました。

PP14

さらに願生仏国土の思想を表した經典の翻訳の流れを年代順にまとめるとつぎのようなことがわかりました。

古訳というのは鳩摩羅什以前の時代の翻訳者による訳です。

① 古訳の經典には無量寿だけでなく、無量清浄を取り上げた經典が見られました。

例えば（古訳）佛説無量清浄平等覺經 後漢月支國三藏支婁迦讖譯（後漢 147-200）には「無量清浄」「法寶藏比丘」「無量清浄仏」「無量清浄仏土」「須摩提」という訳語がみられま

した。

「無量寿」は私たちになじみの深い（古訳）佛説無量壽經 252 年曹魏天竺三藏康僧鎧譯（曹魏 249-264）で「法蔵」「安樂国」「無量寿仏」と訳されています。

鳩摩羅什から玄奘までが旧訳で、玄奘からは新訳といわれます。

- ② 玄奘が「無量寿無量光のはたらきを持つ仏極楽世界清浄仏土に焦点を当て『阿弥陀經』を新訳されました。（新訳）稱讚淨土佛攝受經大唐三藏法師玄奘奉詔譯（唐 602-664）では「極楽」「無量寿及無量光」「無量寿仏極楽世界清浄仏土」という語が使われています。

その後に続く新訳の經典も（新訳）大寶積經卷第十七 無量壽如來會第五之一 大唐三藏菩提流志奉詔譯（唐不明～727）と 佛説大乘無量壽莊嚴經でも「無量寿」と「極楽」が踏襲されています。

- ③ 王日休は大衆に教えを広めるため浄土經典の校輯をされた。無量寿經を軸にしつつ「極楽」「阿弥陀」の訳をもちいられました。

「阿弥陀」という訳語については

- ④ 浄土經典の初期の翻訳僧支謙が（古訳）阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經「阿弥陀仏」と訳しています。

- ⑥ 鳩摩羅什は『阿弥陀經』を訳出しました。また、『十住毘婆沙論』の翻訳に「阿弥陀」の語が使われています。願生浄土の思想を顕かにされる意図が感じられます。

「無量寿仏」と「阿弥陀仏」は資料3にあげましたように

* 觀無量寿（仏）經で「無量寿仏」と「阿弥陀仏」が混在してつかわれています。ここにも校輯の意図が感じられました。

- ⑥ 菩提流支は『無量壽經優婆提舍願生偈』で、仏土に『大無量寿經』の「安樂国」、仏に『阿弥陀經』・『觀經』を想起させる「阿弥陀仏」の訳語が使われています。さらに『入楞伽經』に龍樹の名前を入れて訳されました。龍樹の名前は異訳の經典にはみられません。

* 曇鸞大師は『大無量寿經』と『觀無量寿經』と『阿弥陀經』から引文され法蔵菩薩が無量寿仏となる因縁と衆生の救済の教説である大無量寿經を貫く精神を阿弥陀と表現された。

（旧訳）無量壽經優婆提舍願生偈 婆藪槃頭菩薩造(400-480 頃)并註卷上

沙門曇鸞註解（北魏 476~542）

易行道者。謂但以信佛因縁願生淨土。乘佛願力便得往生彼清淨土

無量壽是安樂淨土如來別號

無量壽者。言無量壽如來壽命長遠不可思量也。

經者常也。言安樂國土佛及菩薩清淨莊嚴功德。

＊曇鸞大師は『讚阿弥陀仏偈』で「南無阿弥陀仏を釈して無量寿という」と、南無阿弥陀仏と無量寿を関係付けられています。

（南無阿弥陀仏。釈して無量寿と名づく。經に傍（そ）えて奉讃す。亦安養とも曰ふ。

因みに、親鸞聖人は「釈して無量壽傍經と名づく 讃め奉りて亦安養と曰ふ」（真仏土巻東 p 316）と読まれています）

PP16

まとめます。

曇鸞大師は何故この「南無阿弥陀仏」を「南無無量寿仏」に変えられたのか。

曇鸞大師は一法句を尋ねられて、觀經の「南無阿弥陀仏」を「大經」の法蔵菩薩・無量寿仏・諸仏を貫く願心をあらわす言葉として底を流れる根本の願心をあらわす言葉として「南無阿弥陀仏」を再発見されたのでしょうか。

だからこそ衆生の行のようにあらわされる觀經の「称南無阿弥陀仏」を十八願の十念と混乱させないために「南無阿弥陀仏」ださず、無量寿經の本願と関連があることを示すためにであるとはっきり関連を示すために、「南無無量寿仏」にされたのではないのでしょうか。

大悲の願心が「南無阿弥陀仏」という言葉になられるまでのご苦勞を曇鸞大師のお仕事に見せていただいたおもいがいたします。

拙い考察をお聞きいただきありがとうございます。皆様の御智見をいただければありがたいとおもいます。

発表は以上でおわります

付記

資料 1 論註第一問答と觀經の下下品の対比

論註第一問答	佛說觀無量壽佛經（璉良耶舍譯）
又如觀無量壽經有九品往生。下下品生者。或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善。如此愚人以惡業故應墮惡道經歷多劫受苦無窮。如此愚人臨命終時遇善知識種種安慰爲說妙法。教令念佛。①此人苦逼不遑念佛。善友告言。汝若不能②念者。③應稱無量壽佛。如是至心令聲不絕。④具足十念稱南無無量壽佛。	佛告阿難及韋提希。下品下生者。或有衆生作不善業五逆十惡。具諸不善。如此愚人以惡業故。應墮惡道經歷多劫受苦無窮。如此愚人臨命終時。遇善知識種種安慰爲說妙法教令念佛。①彼人苦逼不遑念佛。善友告言。汝若不能②念彼佛者。③應稱歸命無量壽佛。如是至心令聲不絕。④具足十念稱南

稱佛名故於念念中除八十億劫生死之罪。⑤命終之後見金蓮華。猶如日輪住其人前。如一念頃。即得往生極樂世界。於蓮華中滿十二大劫蓮華方開⑥（當以此償／五逆罪也）觀世音大勢至以大悲音聲。爲其廣說諸法實相除滅罪法。聞已歡喜 應時⑦則發菩提之心。是名下品下生者。」 以此經證。明知下品凡夫但令不誹謗正法。信佛因緣皆得往生。	無阿彌陀佛。稱佛名故。於念念中。除八十億劫生死之罪。⑤命終之時見金蓮花猶如日輪住其人前。如一念頃即得往生極樂世界。於蓮花中滿十二大劫。蓮花方開⑥當花敷時。觀世音大勢至以大悲音聲。即爲其人廣說實相除滅罪法。聞已歡喜。應時⑦即發菩提之心。是名下品下生者。 是名下輩生想。名第十六觀 （大正新修大藏經）
--	---

資料2 論註の第六問答と觀經の下下品

論註第六問答	佛說觀無量壽佛經（璽良耶舍譯）
問曰。業道經言。業道如秤。重者先牽。 ①如觀無量壽經言。②有人造五逆十惡具諸不善。應墮惡道經歷多劫受無量苦。 臨命終時遇善知識教③稱南無無量壽佛。如是至心令聲不絕具足十念④。⑤便得往生安樂淨土。即入大乘正定之聚畢竟不退。與三塗諸苦永隔。先牽之義於理如何。 又曠劫已來備造諸行。有漏之法繫屬三界。但以⑥十念念阿彌陀佛便出三界 繫業之義復欲云何。	佛告阿難及韋提希。下品下生者。或有衆生作不善業五逆十惡。具諸不善。如此②愚人以惡業故。應墮惡道經歷多劫受苦無窮。如此②愚人臨命終時。遇善知識種種安慰爲說妙法教③【令念佛。彼人苦逼不遑念佛。善友告言。汝若不能念彼佛者。應】稱歸命無量壽佛。如是至心令聲不絕。具足十念【稱南無阿彌陀佛。稱佛名故。於⑥念念中。⑤除八十億劫生死之罪。命終之時見金蓮花猶如日輪住其人前。如一念頃】即得往生極樂世界。 （於蓮花中滿十二大劫。蓮花方開當花敷時。觀世音大勢至以大悲音聲。即爲其人廣說實相除滅罪法。聞已歡喜。應時即發菩提之心）。是名下品下生者。 是名下輩生想。名第十六觀 （大正新修大藏經）

資料3 『觀無量壽經』の無量壽仏と阿彌陀仏

阿彌陀仏	無量壽仏
P93 我今樂生 極樂世界 阿彌陀仏所。汝當繫念、諦觀彼國 淨業成者。我今爲汝、	P89 仏說觀無量壽經 p 101（総觀想をおわって）汝等憶持、広

廣說衆譬。 P94 汝今知不、阿弥陀仏、去此不遠 P95 時韋提希、白仏言世尊、如我今者、以仏力故、見彼国土。若仏滅後 諸衆生等、濁惡不善、五苦所逼。云何当見 阿弥陀仏 極樂世界。 P111（雜想觀第十三觀）無量壽佛 身量無邊、非是凡夫 心力所及。然彼如來 宿願力故、有憶想者、必得成就。但想佛像、得無量福。何況觀佛 具足身相。然彼如來 宿願力故、有憶想者、必得成就。但想仏像、得無量福。何況觀仏 具足身相。阿弥陀仏、神通如意 於十方国 變現自在 P112（雜想觀第十三觀）衆生但觀首相、知是觀世音、知是大勢至。此二菩薩、助阿弥陀仏、普化一切。是為雜觀想、名第十三觀。 p 112（願生彼国即得往生上品上生阿弥陀如来至）具此功德、一日乃至七日、即得往生。生彼国時、此人精進 勇猛故、阿弥陀如来、与觀世音 大勢至 無数化仏 百千比丘 声聞大衆 無数諸天 七宝宮殿、 p 113（願求生極樂世界上品中生来迎）行此行者、命欲終時、阿弥陀仏、与觀世音 大勢至 無量大衆 眷属圍繞、持紫金台、至行者前。 p 115（願求生極樂世界上品下生来迎）上品下生者、亦信因果、不謗大乘。但発無上道心。以此功德、回向願求 生極樂国。行者命欲終時、阿弥陀仏 及觀世音 大勢至 P116（願求生於西方極樂世界中品上生至）中品上生者、若有衆生、受持五戒、持八戒齋、修行諸戒、不造五逆、無衆過患。以此善根、回向願求 生於西方 極樂世界。臨命終時、阿弥陀仏、与諸比丘 眷属圍繞、	為大衆、分別解說。說是語時、無量寿仏、住立空中。觀世音 大勢至、是二大士、侍立左右。光明熾盛、不可具見。百千閻浮檀金色、不得為比。時韋提希、見無量寿仏已、接足作礼、白仏言世尊、我今因仏力故、得見無量寿仏 及二菩薩。未来衆生、当云何觀無量寿仏 及二菩薩 P102（華座觀）如此妙華是本法藏比丘願力所成 P105 仏告阿難 及韋提希。此想成已、次当更觀 無量寿仏 身相光明。阿難当知。無量寿仏身、如百千万億 夜摩天閻浮檀金色。佛身高、六十万億 那由他 恆河沙由旬。眉間白毫、右旋婉轉、如五須彌山。佛眼如四大海水、青白分明。身諸毛孔、演出光明。如須彌山。彼佛圓光、如百億 三千大千世界。於圓光中、有百万億那由他 恆河沙化佛。一一化佛、亦有衆多 無数化菩薩。以為侍者。無量壽佛、有八万四千相。一一相、各有八万四千隨形好。一一好、復有八万四千光明。一一光明、徧照十方世界。念佛衆生、攝取不捨。 P111（雜想觀）無量壽佛 身量無邊、非是凡夫 心力所及。然彼如來 宿願力故、有憶想者、必得成就。但想佛像、得無量福。何況觀佛 具足身相。然彼如來 宿願力故、有憶想者、必得成就。但想仏像、得無量福。何況觀仏 具足身相。阿弥陀仏、神通如意 於十方国 變現自在 P120（下品下生）善友告言。汝若不能念者、応称無量寿仏。如是至心、令声不絶、具足十念、称南無阿弥陀仏。称仏名故、於
--	--

P117（願求生極樂世界中品中生至）如此行者、命欲終時、見阿彌陀仏、与諸眷属 放金色光、持七宝蓮華、至行者前。 P117（中品下生即生）、若有善男子善女人、孝養父母、行世仁慈。此人命欲終時、遇善知識、為其広説 阿彌陀仏 国土樂事、亦説法藏比丘 四十八願 p 118I(下品上生化仏来迎)、或有衆生、作衆惡業。雖不誹謗 方等經典、如此愚人、多造衆惡、無有慚愧。命欲終時、遇善知識、為讃大乘 十二部經 首題名字。以聞如是諸經名故、除却千劫 極重惡業。智者復教、合掌叉手、称南無阿彌陀仏。 P119（下品中生化仏迎接即得往生）者、或有衆生、毀犯五戒八戒 及具足戒。如此愚人、偷僧祇物、盜現前僧物、不淨説法。無有慚愧。以諸惡業、而自莊嚴。如此罪人、以惡業故、墮地獄。命欲終時、地獄衆火、一時俱至。遇善知識、以大慈悲、為説阿彌陀仏 十力威德、広説彼仏 光明神力、亦讃戒定慧 P120（下品下生）善友告言。汝若不能念者、応称無量寿仏。如是至心、令声不絶、具足十念、称南無阿彌陀仏。称仏名故、於念念中、除八十億劫 生死之罪。	念念中、除八十億劫 生死之罪。 P122 仏告阿難。此經名觀極樂国土 無量寿仏 觀世音菩薩 大勢至菩薩。亦名淨除業障 生諸仏前。汝当受持。無令忘失。行此三昧者、現身得見 無量寿仏 及二大士。若善男子善女人、但聞仏名 二菩薩名、除無量劫 生死之罪。何況憶念。若念仏者、当知此人 是人中分陀利華。觀世音菩薩 大勢至菩薩、為其勝友。当坐道場 生諸仏家。仏告阿難。汝好持是語。持是語者、即是持無量寿仏名。
--	---

資料4 浄土教經典の中の仏土名仏名

經典	翻訳者	仏土名 仏名
佛説無量壽經 252年	曹魏天竺三藏康僧鎧譯 (曹魏 249-264)	法藏 安樂国 無量寿仏
佛説觀無量壽佛經	宋西域三藏畺良耶舍譯 (宋 420—50)	(見)(樂生) 阿彌陀仏 極樂世界 (觀) 極樂 無量

		寿仏 法藏菩薩
佛說阿彌陀經 402年	姚秦龜茲三藏鳩摩羅什譯 (姚秦 344-413)	極樂 阿彌陀仏 西方無 量寿仏
佛說無量清淨平等覺經	後漢月支國三藏支婁迦讖 譯(後漢 147-200) 般舟三昧 經	法寶藏比丘 無量清淨仏 無量清淨仏土 須摩提
阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀 過度人道經	吳月支國居士支謙譯(吳 159-254)	曇摩迦 阿彌陀仏 須摩 提
大阿彌陀經(王日休)	崇寧四年(1105) — 乾道九 年(1173) 正月一日	其世界名曰極樂。其佛號 阿彌陀
大寶積經卷第十七 無量 壽如來會第五之一	大唐三藏菩提流志奉詔譯 (唐不明~727)	法處 無量寿 極樂
佛說大乘無量壽莊嚴經	西天譯經三藏朝散大夫試 光祿卿明教大師臣法賢奉詔 譯(宋?) 北宋 960-1127 南 宋 1127-1279	作法 無量寿 極樂
稱讚淨土佛攝受經	大唐三藏法師玄奘奉詔譯 (唐 602-664)	極樂 無量寿及無量光 無量寿仏極樂世界清淨仏土
十住毘婆沙論卷第五 易 行品第九	聖者龍樹造(150-250 頃) 後秦龜茲國三藏鳩摩羅什 譯(後秦 344-413)	阿彌陀等諸佛 無量寿仏 若人願作佛 心念阿彌陀 應時爲現身 是故我歸命 願我於佛所 心常得清淨 若人命終時 得生彼國者 即具無量德 是故我歸命
無量壽經優波提舍願生偈 520年	婆藪槃豆菩薩造(400-480 頃) 元魏天竺三藏菩提流支譯 (後魏不明~527)	世尊我一心 歸命盡十方 無礙光如來 願生安樂國 正覺阿彌陀 法王善住持 故我願往生 阿彌陀佛國 安樂國清淨 常轉無垢輪 我作論說偈 願見彌陀佛 普共諸衆生 往生安樂國 觀安樂世界。見阿彌陀佛。

		願生彼國土故 身業禮拜阿彌陀如來應正遍知 心常作願。一心專念畢竟往生安樂國土 入第二門者。以讚歎阿彌陀佛隨順名義 稱如來名依如來光明想修行故。得入大會衆數。是名入第二門
無量壽經優婆塞願生偈 婆藪槃頭菩薩造(400-480頃)并註(卷上)	沙門曇鸞註解(北魏476~542)	易行道者。謂但以信佛因緣願生淨土。乘佛願力使得往生彼清淨土 無量壽是安樂淨土如來別號 無量壽者。言無量壽如來壽命長遠不可思量也。經者常也。言安樂國土佛及菩薩清淨莊嚴功德。
讚阿彌陀佛偈	曇鸞法師作(北魏476~542)	南無阿彌陀佛 釋名無量壽傍經 奉讚亦曰安養 現在西方去此界 十萬億刹安樂土 佛世尊號阿彌陀我願往生歸命禮 本師龍樹摩訶薩 誕形像始理顏綱 關閉邪扇開正轍是閻浮提一切眼 伏承尊悟歡喜地 歸阿彌陀生安樂
入楞伽經卷第九 總品第十八之一	元魏天竺三藏菩提留支譯(後魏不明~527)	大慧汝諦聽 有人持我法於南大國中 有大德比丘名龍樹菩薩 能破有無見爲人說我法 大乘無上法證得歡喜地 往生安樂國

願生仏国土の思想を表した經典の翻訳の流れ 年代順並べ替え

*** 古訳の經典には無量寿だけでなく、無量清浄を取り上げた經典が見られる。**

「無量清浄」

(古訳) 佛説無量清浄平等覺經

後漢月支國三藏支婁迦讖譯 (後漢 147-200)

法寶藏比丘 無量清浄仏 無量清浄仏土 須摩提

「無量寿」

(古訳) 佛説無量壽經 252 年

曹魏天竺三藏康僧鎧譯 (曹魏 249-264)

法蔵 安樂国 無量寿仏

*** 玄奘が「無量寿無量光のはたらきを持つ仏極楽世界清浄仏土に焦点を当て『阿弥陀經』を新訳された。**

(新訳) 稱讃浄土佛攝受經

大唐三藏法師玄奘奉詔譯 (唐 602-664)

極楽 無量寿及無量光 無量寿仏極楽世界清浄仏土

(新訳) 大寶積經卷第十七 無量壽如來會第五之一

大唐三藏菩提流志奉詔譯 (唐不明~727)

法處 無量寿 極楽

(新訳) 佛説大乘無量壽莊嚴經

西天譯經三藏朝散大夫試光祿卿明教大師臣法賢奉詔譯 (宋?)

北宋 960-1127 南宋 1127-1279 作法 無量寿 極楽

*** 王日休は大衆に教えを広めるため浄土經典の校輯をされた。無量寿經を軸にしつつ「極楽」「阿弥陀」の訳をもちいられた。**

(新訳) 大**阿弥陀**經 (王日休) (北宋) 崇寧四年 (1105) — 乾道九年 (1173)

正月一日 其世界名曰極楽。其佛號阿彌陀

「阿弥陀」

*** 浄土經典の初期の翻訳僧支謙が「阿弥陀仏」と訳した。**

(古訳) **阿彌陀**三耶三佛薩樓佛檀過度人道經

吳月支國居士支謙譯 (吳 159-254)

曇摩迦 阿弥陀仏 須摩提

*鳩摩羅什は『阿弥陀經』を訳出した。また、『十住毘婆沙論』翻訳に「阿弥陀」の語を使って願生浄土の思想を顕かにされた。

(旧訳) 佛説阿彌陀經 402年

姚秦龜茲三藏鳩摩羅什譯 (姚秦 344-413)

極樂 阿弥陀仏 西方無量寿仏

(旧訳) 十住毘婆沙論卷第五 易行品第九

聖者龍樹造 (150-250 頃)

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯 (後秦 344-413)

阿彌陀等諸佛 無量寿仏

若人願作佛 心念阿彌陀 應時爲現身 是故我歸命

願我於佛所 心常得清淨

若人命終時 得生彼國者 即具無量德 是故我歸命

「無量寿仏」と「阿弥陀仏」

*観無量寿（仏）經で「無量寿仏」と「阿弥陀仏」が混在してつかわれている。

(旧訳) 佛説観無量壽仏經

宋西域三藏曇良耶舍譯 (宋 420—50)

(見) (樂生) 阿弥陀仏 極樂世界

(観) 極樂 無量寿仏 法藏菩薩

*菩提流支は『無量寿經優婆提舍願生偈』で、仏土に『大無量寿經』の「安樂国」、仏に『阿弥陀經』・『観經』を想起させる「阿弥陀仏」の訳語を使われている。さらに『入楞伽經』に龍樹の名前を入れて訳された。

(旧訳) 無量壽經優波提舍願生偈 520年

婆藪槃豆菩薩造(400-480 頃)

元魏天竺三藏菩提流支譯 (後魏不明~527)

世尊我一心 歸命盡十方 無礙光如來 願生安樂國

正覺阿彌陀 法王善住持

故我願往生 阿彌陀佛國

安樂國清淨 常轉無垢輪

我作論說偈 願見彌陀佛 普共諸衆生 往生安樂國

觀安樂世界。見阿彌陀佛。願生彼國土故

身業禮拜阿彌陀如來應正遍知

心常作願。一心專念畢竟 往生安樂國土

入第二門者。以讚歎阿彌陀佛隨順名義

稱如來名依如來光明想修行故。得入大會衆數。是名入第二門

(旧訳) 入楞伽經卷第九總品第十八之一

元魏天竺三藏**菩提留支**譯 (後魏不明~527)

大慧汝諦聽 有人持我法

於南大國中 有大德比丘

名**龍樹菩薩** 能破有無見

爲人說我法 大乘無上法

證得歡喜地 往生安樂國

*曇鸞大師は『大無量寿經』と『觀無量寿經』と『阿弥陀經』から引文され法藏菩薩が無量寿仏となる因縁と衆生の救済の教説である大無量寿經を貫く精神を阿弥陀と表現された。

(旧訳) **無量壽**經優婆提舍願生偈 婆藪槃頭菩薩造(400-480 頃)并註卷上
沙門曇鸞註解 (北魏 476~542)

易行道者。謂但以信佛因縁願生淨土。乘佛願力便得往生彼清淨土

無量壽是安樂淨土如來別號

無量壽者。言無量壽如來壽命長遠不可思量也。

經者常也。言安樂國土佛及菩薩清淨莊嚴功德。

*曇鸞大師は『讚阿弥陀仏偈』で「南無阿弥陀仏を釈して無量寿という」と、南無阿弥陀仏と無量寿を関係付けられている。

(南無阿弥陀仏。釈して無量寿と名づく。經に傍(そ)えて奉讚す。亦安養とも曰ふ。

親鸞聖人は「釈して無量壽傍經と名づく 讚め奉りて亦安養と曰ふ」(真仏土卷東 p 316))

(旧著) 讚阿彌陀佛偈 曇鸞法師作 (北魏 476~542)

南無阿彌陀佛 釋名無量壽傍經 奉讚亦曰安養

現在西方去此界 十萬億刹安樂土

佛世尊號阿彌陀 我願往生歸命禮

本師龍樹摩訶薩 誕形像始理頹綱

關閉邪扇開正轍 是閻浮提一切眼

伏承尊悟歡喜地 歸阿彌陀生安樂

上巻はどうしてこのような願いを起こされたのかを尋ねる、仏の仕事を問うています。そして仏の仕事を問えば問うほど、実は私達がとんでもない生き方をしていることを、仏の方が見抜いて下さっていたことを尋ねていくことになります。人間の在り方を如来の本願に見抜かれていたからです。ですから成就に立って因願を探るという方法は、本願によって、「自己とは何か」を明らかにする方法です。

八番問答は本願成就文と下下品に立って始まります、それは成就がなければ、私たちは本願と言ってみても夢のような話になります。

成就文は、身に覚えがあるから分かります。成就に立って因願を探るという方法論です。本願によって、命終わるまで愚かな自己を明らかにしていく方法です。人間に生まれて自我意識が始まったところから仏に背いているということです。そして発想は量的です。誹謗正法と五逆が二つあると考え、一つならまだ善いけれども、二つになったら救われないと考えます。しかしそういうことではなく、質が違うという所に導く問答になっています。つまり誹謗正法は、仏法に遇わなければ、絶対に分かりません。

#1. 因(法蔵菩薩の本願)と果(阿弥陀如来の仏力)……「不虛作住持功德成就」

「蓋しこれ阿弥陀如来の本願力なり。乃至 言うところの不虛作住持は、本(もと)法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依ってなり。願もって力を成ず、力もって願に就(つ)く。願徒然ならず、力虚設(こせつ)ならず。力・願あい符(かな)うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う、と。(西注釈版 197、東聖典 198。西注釈版 361、東聖典 316、島地聖典 12-45、12-151) という阿弥陀如来の本願力成就を示す文であった。

親鸞は本願力に出遇(あ)って、「空過の人生が」仏果を得る「功德の人生」に転換されたことを慶ばれて、「本願力にあひぬれば むなくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」(西注釈版 580、東聖典 490、島地聖典 11-24)

参照:講解教行信證、真仏土の巻、法蔵館、星野元豊著p1540 によると

不虛作住持功德成就というのは、一口に言えば、つまり阿弥陀如来の本願力のことをいうのである。(中略)いま不虛作住持(決して無駄事ではなく、しっかりと阿弥陀如来が住持して下さること)ということとは、そのもとを辿ってみれば、

因位の法蔵菩薩が 48 願を起こして、五劫の思惟と修行の結果、願が成就して、今日、浄土が建立され、法蔵は浄土の主、阿弥陀仏として一切衆生救済のはたらきを自在に働いて下さるのである

(国王 ⇒ 沙門(出家) ⇒ 比丘(願心・本願) ⇒ 菩薩(実践・成就)「因」⇒「果」阿弥陀仏)

法蔵の本願(因)が今日の阿弥陀如来の不可思議の力(果)をもたらしたのである。今日の如来の救済力(果の内容)こそ 48 願の一つ一つを満足せしめるはたらきをしているのである。

まことに願はいたずらでなかった。むだではなかった。この願によって今日のこのような如来と浄土のはたらきが実現しているのである。

因位の願が如来のはたらきを生み、如来のはたらきはこの願を離れてあるのではない。如来の救いのはたらきは今日この私の上に現にはたらいているではないか。如来の神力は決していつわりではなかったのである。因位法蔵の願といま現に私の上にはたらいている如来の神力と会い違うことなく、ぴったりと一つになって、凡夫救済が完成されているのである。まさに不虛作住持功德は成就しているというべきであろう。

▽「我々の体験から言えば、助けんというのが仏の願心であるが、その助けんという願心にふれたところを我々の自覚として表せば、もう助からんでもよいという願が出てくることではなかろうか。すなわち「勿体ない」ということが出てくるのである。助けんという如来の大きな御心に目覚めてみれば、どうして

も助けて貰わなければならぬというような厚かましさはなくなり、助けて貰わなければならぬという心は撤回されるのである。そこに、地獄に落ちて後悔しないという心が出てくる。それが助かったということである。助けんという願に助けられたのである。助けんという願が成就してから、助かるということではない。本当に助けんという願に目覚めれば、もう助かったのである(仏の大きな慈悲心に触れて仏へのお任せになっていく)。それが仏の願(因)が願自身を成就している(果)ことである。因に果を成就していることである(因が縁に触れて働きを起し、目覚めの結果に至る)。仏本願力を分けて仏力と本願力にせられた。(曇鸞大師)▽

天親菩薩の浄土論の特色は、国土莊嚴から衆生世間莊嚴を開かれたところにあるが、何のためかという不虛作住持功德を明らかにするためである。

「観仏本願力」は浄土論の根底である。また三部經の根底であり仏道の根底である。仏道の根底そのものが**仏本願力で、それによって浄土が成り立つ。つまり仏道の事業の行われる場所である。**

曇鸞大師は仏本願力を分けて、仏力と本願力にせられた。本は因本、仏力は光明である。光明威神力である。仏力も本願も智慧である。智慧によって生まれ、智慧によって統理されている世界である。二つに分けて解釈されるのはそれによる交互的であることが明らかにされたのである。

仏法は初めから「**人間とは何か**」に焦点があります。そして仏法の罪は外に問題を見つけるのではなく、自分の内側に「人間とは何か」と問うてきます。そして仏法の罪とは、仏から見抜かれている罪ということです。自分では自分のことを誹謗正法とは思いません。逆に自分こそ仏法を背負っていると自負しています。

曇鸞の著「浄土論註」の中に八つの問答があり、世親(天親)の書いた「浄土論」の補足や解説が書かれています。

- ① いかなる衆生が往生するのか、(回向門に説く「普く諸々の衆生と主に」の機を問い、大經・觀經により一切外道人、凡夫人、下品の機と答え)、
- ② 五逆と謗法は往生できるか、(大經の逆謗抑止と觀經の逆惡往生の相違を問い、二種の重罪と逆惡の単罪の差を答え)、
- ③ 五逆罪がなくても謗法があれば往生できないのか、(謗法は往生できない)
- ④ 謗法の罪とは何か、
- ⑤ 五逆罪より謗法の罪はなぜ重いのか、
- ⑥ 業道經と觀經の同異を問う、(下下品の十念と五逆十惡の輕重を問い、在心・在緣・在決定の三在釈で十念の功德を証明)
- ⑦ 一念を問う、(念は時節の念ではなくて、仏の總相別相を憶念相續し、また称名相續することとし)、
- ⑧ 念の多少を知りうるか、(業事成弁をあげて称名の頭数を知るを要しないと、また、念の数を知る方法もあるが口授すると答える。

業事成弁(ごうじ-じょうべん):業道成弁(じょうべん)・業成(ごうじょう)ともいう。**浄土往生の業因が成就して、必ず浄土に生れ得ることが決定することをいう。**

『論註』八番問答に、『經』(觀經)に「十念」とのたまへるは、**業事成弁**を明かすのみ。かならずしも頭数を知ることを須(もち)あず。「蟪蛄は春秋を識らず」といふがごとし。この虫あに朱陽の節を知らんや。知るものこれをいふのみ。十念業成とは、これまた神に通ずるものこれをいふのみ。ただ念を積み相續して他事を縁ぜざればすなはち罷(や)みぬ。(論註) とある「業事成弁」が出拠。

「十念」と往生の業因が成就することを述べているのであって、十という数に特に意味はなく、十念で業成するという仏の立場からの言葉であるとする。『觀經』下品下生にある、

かくのごとく心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆゑに、念々のなかにおいて八十億劫の生死の罪を除く。(東聖典 120-121)
の十念念仏を『無量寿経』第十八願の乃至十念の意と合わせて、浄土往生の業事成弁とする。もっとも御開山は法然聖人が乃至十念という数に固執するのではないとして「念仏往生の願」とされた意を承けて第十八願をみておられた。

曇鸞の八番問答の第一番目は、天親の『願生偈』の最後の回向門に、

我作論説偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安楽国 (我論を作り、偈を説きて、願わくは弥陀仏を見てまつり、普(あまね)くもろもろの衆生と共に、安楽国に往生せん)とあるのを承けて、

問うて曰わく。天親菩薩、回向の章の中に「普共諸衆生 往生安楽国」と言えるは、此れは何等の衆生を共と指したまうや。

と、「普くもろもろの衆生と共に」とある衆生とは誰をさすのかという問いである。これに対し曇鸞は、『大経』によれば、「一切外道の凡夫人」であり、『観経』によれば「下品の凡夫」とであると、要するに「一切の凡夫である」と確認している。この問いが必要だったのは『浄土論』を何の前提もなしに読むとすると、「衆生」の意味内容としては、「善男子・善女人」か、「器世間清浄・衆生世間清浄」という場合の「衆生」、これだと、衆生は仏と菩薩、この二つの可能性が考えられ、いずれにしてもその枠から外れるひとはたくさんいて、本当の意味で「すべての衆生」ということにはならない。だから曇鸞の文脈(曇鸞は第一問答は議論の出発点として)においては「く共に」と呼びかけられるのは誰か」という問題を立てて確認する必要があった。(天親菩薩は観経を読んでない、曇鸞大師が初めて機の深信をはっきりされた)

そこで、『教行信証』の一番目の問答、『論註』の第二問答は、

問うて曰わく、『無量寿経』に言(のたま)わく、「往生を願ぜん者皆往生を得しむ。唯五逆と誹謗正法とを除く」と。『観無量寿経』に、「五逆・十悪もろもろの不善を具せるもの、また往生を得」と言えり。この二経云何が会(え)せんや。

と、『大経』の本願では、五逆と誹謗正法は救われないとなっているが、『観経』の下品下生に関する記述では五逆・十悪は往生するとなっている、この不一致をどう考えるといいのかという問いです。これに対し、曇鸞は、

一経には二種の重罪を具するをもってなり。一つには五逆、二つには誹謗正法なり。この二種の罪をもつてのゆゑに、このゆゑに往生を得ず。一経はただ、十悪・五逆等の罪を作ると言うて、「正法を誹謗す」と言わず。正法を謗せざるをもってのゆゑに、このゆゑに生を得しむ、と。

五逆と謗法の二つともを犯したらだめだが、五逆や十悪だけならば問題ない。唯除の文言を「五逆または誹謗正法」と理解するのではなく「五逆にしてなおかつ誹謗正法」と両方とも犯したという意味にとらえている。

次の問答(第三)でさらに、

問うて曰わく、たとい一人は五逆罪を具して正法を誹謗せざれば、『経』に得生を許す。また一人ありて、ただ正法を誹謗して五逆もろもろの罪なきもの、往生を願ぜば、生を得るやいなや。

どちらか一方だけの場合はどうなるのか。ただ正法を誹謗せしめて、さらに余の罪なしといえども、必ず生を得じ。

他の罪がなくても、謗法の罪を犯せばだめだ、と言う。それは、誹謗正法の罪極重なるをもってのゆゑなり。曇鸞は五逆より誹謗正法の方が罪が重いと見ていることがはっきりする。問題の焦点は誹謗正法であることが明確になった。そこで、三番目と四番目の問答は誹謗正法に焦点を絞った確認となる。

三番目の問い、問うて曰わく、何等の相かこれ誹謗正法なるや。

答えて曰わく、もし無仏・無仏法・無菩薩・無菩薩法と言わん、かくのごときらの見をもって、もしは心に自ら解(さと)り、もしは他に従いて、その心を受けて決定するを、みな「誹謗正法」と名づく、と。

(曇鸞によれば)誹謗正法とは、仏も仏法も、菩薩も菩薩法も、存在しない、そして存在する必要もないと否定することである。自分で勝手に解釈してそのように納得してしまったり、人からそう聞かされてそのまま信じてしまう。さらにそれを口に出して言う。「誰のたすけも要らない。自分は自分で何でもできる」という態度です。「見」とは特定の考え方が絶対化されてしまうこと、ここでは仏・菩薩の存在と存在の意味を否定し、決めつけて、なおかつそれを公言してはばからないことを誹謗正法といっている。

次の四番目の問答は、

問うて曰わく、かくのごときらの計は、ただこれ己が事なり、衆生において何の苦悩あればか、五逆の重罪に踰(こ)えんや。

謗法とはただ自分の中だけで生ずる問題であって、他人に迷惑をかけるわけではない。心に思っただけを言っているだけである。一方五逆はいずれも他人を傷つけたり、迷惑をかける行為である。それになぜ五逆より謗法のほうが罪が重いのかと問う。それには、

答えて曰わく、もし諸仏菩薩、世間・出世間の善道を説きて、衆生を教化する者ましまさずは、あに仁・義・礼・智・信あることを知らんや。かくのごとき世間の一切善法みな断じ、出世間の一切賢盛(げんじょう)みな滅しなん。

世間の善法はすべて仏・菩薩の教化によって成り立っている。だから正法がなければ社会秩序根底から覆ってしまう。そういうことを知らずに出来事の表層だけを見ると判断を誤る。

汝ただ五逆罪の重たることを知りて、五逆罪の正法なきより生ずることを知らず。このゆえに謗正法の人はその罪もっとも重なり、と。五逆は正法が損なわれていることから生じる現象の一つにすぎない。現象に現われたことの良し悪しだけでなく、それらを根拠づけている根柢、即ち正法のほうがより重要で、それを否定することは最も重い罪なのであると。

五逆の罪は、目に見える形で現われるのでわかりやすい罪であり、世俗的な常識があれば、それに気付き反省したり謝罪したりすることができる。阿闍世の場合でも、誰かに責められて苦しみが生じた訳ではない。誰かに教えてもらって慙愧したのでもない。仏や耆婆は慙愧こそが阿闍世が人間性を取り戻す唯一の契機であると見ている。父を殺し母を傷つけるという行為は教えられなくても苦悩が生じる。五逆は、仏や仏法がなくても罪を犯したことを自覚できる、自覚しやすい罪である。

謗法は法に出遇わなければそれが罪であうことに気付くことはない。だから謗法に気付くということは、正法に出遇い、教えに照らされるということで成り立つ。気付かなければ慙愧や懺悔が生じない。罪の自覚のない、いわば無明の罪、それが謗法の罪である。「謗法はより奥深い所で問題となる罪であると、曇鸞は言いたいのではないか。」このように言われると、どういうことをすると正法を誹ることになるのかということになる。口で仏法の悪口をいうことが誹謗正法であるのか、心のなかでそういうことを思うことが謗法なのか、ということである。『御消息』では

師をそしり、善知識をかるしめ。同行をもあなずり(悔)なんどしあわせたまうよしきこえそうろう。あさましくそうろう。すでに、謗法のひとなり、五逆のひとなり。なれむつぶべからず。(東聖典 562)

とあり、悪口を言うようなことも含まれるのだろうが、八番問答で問題となっている謗法とは、このようなことなど指しているようだ。曇鸞によれば、謗法は本願から除かれることになるようである。

五逆と謗法の二つともを犯したらだめだが、五逆や十悪だけならば問題ないと。唯除の文言を「五逆または誹謗正法」と理解するのではなく「五逆にしてなおかつ誹謗正法」と両方とも犯したという意味にとらえている。

問答(五)でさらに、

問うて曰わく、たとい一人は五逆罪を具して正法を誹謗せざれば、『経』に得生を許す。また一人ありて、ただ正法を誹謗して五逆もろもろの罪なきもの、往生を願ぜば、生を得るやいなや。

どちらか一方だけの場合はどうなるのかと。ただ正法を誹謗せしめて、さらに余の罪なしといえども、必ず生を得じ。

他の罪がなくても、謗法の罪を犯せばだめだ、と言う。それは、誹謗正法の罪極重なるをもつてのゆえなり。これで曇鸞は五逆より誹謗正法の方が罪がおもいと見ていることがはっきりする。問題の焦点は誹謗正法であることが明確になった。そこで、三番目と四番目の問答は誹謗正法に焦点を絞った確認となる。

問答(六)。業道について説かれた『経』には、「業道は、秤(はかり)のように、重いほうへひきつけられる」といってある。『観無量寿経』では「五逆・十悪をおかし、いろいろの善からぬことをなすものは、まさに悪道に墮(お)ち、長いあいだをへめぐる、はかりしれぬ苦をうけるであろう。(しかし)いまわのときに、善き人の教えに遇い、南無阿弥陀仏と称える。このように心をつくし、声を絶やすことなく、十念を具足するならば、そのときそのまま安樂浄土に往生して、大乘の正定をえた聚(ともがら)に入ることができ、もう二度と退くことなく、三塗のもろもろの苦しみを、永(とわ)にはなれるのである」といってある。(とすれば)業が重いほうへひきつけられるという意義は、道理としてどうなのか。

答。あなたは、五逆・十悪といった(三界に)つなぎとめられる業などのほうを重とし、下の下の部類の人の十念のほうを軽として、だから罪のためにひかれてまず地獄に墮(お)ち、三界につなぎとめられるはずだという。それではいま、道理をもって、(どちらの業が)軽いか重いかを比較することにしよう。

(業の軽重は)「心に在(あ)り」、「縁に在り」、「決定に在る」のであって、時節の長い短かい、多い少ないにあるのではない。

どのように「心に在る」のか。かの五逆・十悪などの罪をつくる人は、自ら虚妄顛倒(いつわりさかさま)の思いにとらわれて罪をつくる。この十念は、善き人がいろいろ手だてをつくして慰(なぐさ)め、実相の法(即ち名号)を説かれるのを聞くことによって生じる。一方は実(まこと)、一方は虚(いつわり)である。どうして比較できようか。(信心の有無が問われている)

たとえば、千年このかたの闇室に、もし光が少しでもさしこめば、そのときたちまち明るくなる、というようなものである。闇が室に千年あったからといって、どうして(闇が)室をはなれないということができようか。これを「心に在る」というのである。(本来性を失って(不実・虚妄)いたための苦しみに気づき、本来性を回復の感動(無分別智))

「最後の贈物」2015/1/1 ともしび第747号 東本願寺出版部 p.9

90 歳になるご門徒のおばあさんがなくなられた。お内仏のお給仕を丁寧になさり、聞法を何よりの生きがいになされていた。けがをされ、離れて暮らす息子たちと相談し、老人施設に入所することになった。

その頃、孫の結婚が決まり報告に行かれると、おばあさんは大層喜ばれ「どうしても渡しておきたかったの」と真新しい百貨店の紙袋を手渡された。子や孫は結婚のお祝いを用意してくれていたことに驚き、しっかりしているうちに報告できてよかったと安心された。ところが、家に帰って袋の中身を見ると、手垢のついた「正信偈」の本が入っていた。それを見た子らは「認知症が随分進んでいたようだ」とがっかり。

まもなくおばあさんは亡くなられ、最後の贈り物である「正信偈」の本は、おばあさんが大事にしていたものだからと、遺体と一緒に火葬された。

葬儀が終わり、その事を聞かされて私は愕然とした。その贈り物を認知症によるものではないと確信できたからである。おばあさんは、念仏ある生活を築いてほしいとの願いを、「正信偈」の本を手渡すことを通して伝えかったのである。

子らは遠くに離れて暮らしていたため、おばあさんが何を大切に生きて何を伝えなかったのか。その願いを感じることができず、最後の贈り物を受け取ることができなかったのである。

どのように「縁に在る」のか。かの罪をつくる人は、自ら妄想の心にあり、煩惱虚妄のむくいをうけている衆生によって罪を生じるのである。この十念は、このうえなき信心をえ、阿弥陀如来のたくみな手だてである莊嚴、真実の清浄さをそなえた功德の名号によって、(十念を)生じる。[\(念仏に帰した感動、阿弥陀如来の方便莊嚴、真実清浄、無量功德より生じる信心\)](#)

どのように「決定に在る」のか。かの罪をつくる人は、後(あと)があると油断する心、雑念のまじわる心によって罪を生じる。この十念は、後をあてにしない(緊張した)心、雑念のまじわらない(ひたむきな)心によって生じるのである。これを「決定に在る」というのである。[\(明日がある、世俗の地位・名誉・お金・我・私の物に捉われている\)](#)

暁烏敏と若者対話「海雲」No.159。より。2024.12.8. :ある冬の夜、金沢市の崇信学舎で講和の時です。この日は二尺(約60cm)の雪が積もっていました。その雪の中を2里(8km)の道を遠しとせず(3時間以上)して、一人の若者がまいりました。講和がすむと、聴衆をかき分けて、私の前に進み出て、声高く「先生、私は今日はどうでも、極楽参りの道を聞かして貰いたいと思ってまいりました。私はあなたを信じてまいりました。あなたから聞かねば聞く人が無いと思ってまいりました。

……先生、私は村一番の悪者であります。幼い時から、ばくちが好きで、親に出刃包丁を持って向かって金をゆすったような大悪人であります。私が地獄に堕ちねば堕ちる者が無いのであります。先生、私はあなたを信じていますから、あなたの仰ることなら何でも致します。死ねと仰ればしにますから、どうか極楽へ行く路を聞かせて下さい。」と切実に求めるのであります。

この時、私は申しました。「そんなに極楽へ行きたければ路を教えてあげましょう。あなたは、私の言うことなら何でもすると言いましたな、それは本当ですか」と。

彼は真心こめて「本当です。あなたが死ねと仰れば死にます。」と申します。

「それでは、私はあなたに極楽の路を教えてあげます。あなたは、三つのことを止めなさい、すると極楽へ行かれます。第一に欲をすてなさい、第二に腹を立てぬようにしなさい、第三に愚痴を言わぬようにしなさい、これだけであれば、自然に極楽に行かれます。」という、(貪瞋痴の煩惱を止める)彼はややしばらく、考えていましたが、ややありて、「先生、それは、私には一つも出来ません。死ねと仰れば死にますけれど、その三つはどれも出来ません。」と彼は言います。

「死んだって駄目です、あなたは私の言うことは何でもすると言いつつ、この三つのことが出来ないのですか。」 [若者:「出来ません」](#)

「それでは、どうしてもあなたは助かりません。極楽へは行かれませんか。」(完全にぶちのめされ、絶望のどん底に突き落とされた) この時、彼はホロリと涙をこぼしていました。

「あなたは駄目なのです、とても駄目なのです。地獄へ堕ちるのです。仕方がないではありませんか。然し、あなたが、この雪の中をも厭わずして、態々(わざわざ)ここまで極楽の路を求めに来た。そのあなたの心は、地獄行きのあなたの心は、地獄行きのあなたの心に生まれた極楽行の心であります。その心があなたを助けて下さる仏の本願力の現れであります。あなたが、今、私にすがって仏の道を求

めておる。その心がそのまま仏の心であります。お助けはその外にはありませんぞ。あなたが助けて欲しいと思いこんだ一念が、そのままたすけにやおかぬ本願のまことです。この心の外に極楽の路はありません。」と申しますと、彼は、はらはらと涙を流し、

「先生、分かりました。ありがとうございました。堕ちるこのままだ、お助けでありました。」

と申しまして、彼はその後、無二の信者となって、以後、今日まで、村一番の徒(いたずら)者は、村一番の喜び手となつてうるわしい日暮らしをやっています。そしてその法悦に、私は折々泣かされたり、鞭撻を加えられたりしています。

この三義において比較すれば、十念のほうが(業が)重い。(だから)重いほうへひきつけられて、三界をでることができるのである。両經(業道經と觀經)の義はまったく一つである。

問答(七)。どれほどの時間を一念というのか。一念の自覚

答。ここに一念といわれているのは、阿弥陀仏の全体の相(すがた)なり、一部の相なりを憶念して、そこに觀じられてくるまにまかせて、心にほかの想(おも)いをいれず、十念が相續するのを、名づけて十念とするのである。ただ口に仏の名号を称えるのだけでも、このようにいえる。

問答(八)。仏を念ずる数の多い少ないを知る必要があるのか。

答。『觀經』にいうのは、十念とは往生の業がまっとうしたことを明かすのみで、必ずしも念ずる数の多い少ないを知る必要はない、ということである。十念の業がまっとうしたというのも、これと同じで、(人間の)はかりしれぬ境地に到達したもののみが、十念というのである。

(我々の方は)ただひとえに念(おも)いを積み続け、他のことを思いうかべないなら、それで十分です。どうして、念ずる数を知る必要があるだろうか。どうしても知る必要があるのならば、筆でこれを書きしるすことはできないのである。念の数を知る方法もあるが口授すると答える。